

東日本大震災
—南ア救助チーム活動報告:全日程同行を終えて—

2011年3月31日
在南アフリカ日本大使館
北川裕久

3月11日に我が国東北地方を襲った巨大地震・津波被害の発生直後から、南アフリカ共和国(以下、南ア)の人道支援組織「Rescue South Africa(以下、RSA)」には、日本での救助活動に参加したいとする南ア国内の消防士や救命救急士らの志願が相次ぎ、同行プレス関係者も含め総勢49名から成る救助チームが編成され(注:最終的には45名が訪日)、わずか3日間で日本での活動のための準備が整えられました。私は、3月16日(水)の南ア出発から28日(月)の南ア帰着まで(日本滞在は18日(金)から27日(日)まで)の全日程にリエゾンとして同行したところ、同チームについて感じたことなどをご紹介します。

なお、この場を借りて、被災された方々へお見舞い、そして亡くなられた方々に対して心からお悔やみ申し上げます。また、同チーム受け入れに際して御協力いただいた宮城県警並びに在京南ア大使館関係者、外務省の同僚、そして同チームを応援して下さった南ア在留邦人の皆様に心から感謝申し上げるとともに、震災発生直後から寝る間も惜しんで救助・搜索活動にあたっておられる日本全国の自衛隊、警察、消防他、関係当局関係者の活動に深甚なる敬意を表します。

1. チームについて

(1) 統制のとれた素晴らしいチーム

(ア) 今回日本に派遣されたメンバーのうち、数名の RSA 常駐スタッフ及びプレス関係者を除く30名超は、普段各々の消防や救命救急医療機関に所属する公務員が大半です。人種構成は白人、黒人、インド系、カラードと多彩で女性消防士も含まれるなど、まさに「レインボー・ネーション南ア」を象徴するチームでした。全隊員が一同に会したのは訪日直前が初めて



であったにもかかわらず、RSA の CEO を務めるイアン・シェール総隊長及び搜索現場で指揮をとるコリン・ダイナー隊長のリーダーシップの下、南ア出国から帰国までチームの統率が規律正しく保たれていたことは、特筆に値します。

(イ) 日本までの往路、日本での活動展開に際しての留意事項の紹介を求められたので、私から、被災者の方々との関係、そしてチームのクレディビリティの観点からも、トイレやタバコのポイ捨てには十分な配慮をお願いしたい旨など、南ア出発前に当館坂本公使と共に行ったオリエンテーションでの留意事項につき改めて指摘しておいたところ、活動期間中これら留意事項が徹底して遵守された点は、共に搜索活動にあたった宮城県警関係者も感心しておられました。また、被災地での取材活動に関する留意点について同行取材チームの理解・協力が得られたことも、チーム全体の評価の向上に寄与したと思います。

(ウ)宮城県内での活動を終えキャンプ地を出発する際、「捜索活動が終わったとは言え、我々は帰国するまで南アの国旗を背負っていることを忘れてはならない、最後まで責任ある行動をとるように」とのダイナー隊長の言葉を耳にした時、彼らのプロフェッショナリズムと卓越したチームワークの原動力を改めて感じました。

(2)協調性豊かなチーム

(ア)7日間にわたるテント生活の夜間の気温は、日によっては氷点下8度超、日中の気温も5-6度で小雪も舞い散る「極寒」の中での活動でしたが、誰一人文句一つ言わず(但し、さすがに寒さには耐えきれず、隊員からの要請で総隊長が毛布を現地で購入し支給)、キャンプ内は、日替わり交代で食事を担当するサブ・チームの用意する食事をとりながら、終始和やか、かつ活気に満ち溢れた毎日でした。なお、同行プレス関係者に風邪を引きかけた者がいたものの病院で治療を受けるほどの疾病を患う者は一人も出ず、隊員の体力に感嘆するとともに、良好な健康状態に安堵した次第です。

(イ)「南アの『Ubuntu=助け合い』の精神を日本の人達と共有したい」と訪日前にシェール総隊長が述べていたのですが、まさにそのとおり、夜間に野営地に到着したトルコ救助チームへの熱湯の差し入れや、被災工場に入りたいとする工場関係者の希望を叶えるべく安全なアクセス・ルートの確保など、行方不明者捜索活動以外の部分でも、躊躇なく協力の手を差し伸べるなどしていたことも印象的でした。具体的なエピソードについては「ちょっといい話」として後述しますが、



@FelixDlangamandla

靴は泥だらけ、作業服はホコリだらけの格好になりながらも、こうした真摯な姿勢で活動にあたる南ア・チームに対して被災地住民からは「ありがとう」「がんばって」といった感謝・励ましの言葉がかけられ、覚えてたの「おじぎ」で対応しながら、隊員達自身も、何か手応えを感じている様子でした。

2. 宮城県警との「チームワーク」

(1)チームのキャンプ地となった宮城郡利府町(仙台市近郊)にある宮城県総合運動公園の駐車場には、成田から約10時間の陸路による移動の後、19日(土)午前2時に到着、南ア・チーム対応係として、後藤警部補と太田巡査の2名が出迎えてくれました。(12トンの物資の飛行機からトラックへの積み替えを終えた後発組は、成田近辺で発電機用燃料を何とか確保した後、午前4時に到着、その日は、何と、2時間ほどの車内睡眠をとった後、テント設営班と県警打ち合わせ班とに分かれて早朝から行動を開始)。以降、26日(金)夕刻のキャンプ地出発まで、同2名に活動現場の調整、現場への先導、給油ポイントまでの案内等を行っていただいたのですが、このような県警側の対応がなければチームの円滑な活動は成し得ませんでした。また、4日目の名取市閑上地区での活動中に強い余震が発生しましたが、5日目と6日目は通信障害により携帯電話が「圏外」となっていた地域(石巻市雄勝)での活動となったため、県警側の配慮により、地震・津波情報をいち早く受け取れるよう長距離通信も可能な無線機を携行いただき、チームは捜索活動に専念できました。

(2)「日本側が助けを必要としている地域で我々は活動を行う、現場までの移動に時間がかかるのなら早く起きてキャンプ地を出発すればよい」との、チームの一貫した姿勢が宮城県警側にも伝わり、比較的早い段階で県警との「チームワーク」が確立されました。

極寒の中、遠距離移動も厭わず早朝から夕刻まで、人命救助ではなく実際には遺体捜索という活動であったにもかかわらず真摯に捜索活動を遂行したチームの姿勢、また、広範な被災地を管轄し多忙を極めているにもかかわらず南ア・チームの応援にかけつけてくれた五十嵐警部他警察関係者の心意気、そして、警部さん達に対して「あなたがたも我々の捜索チームの一員、遠慮はいらない、コーヒーを飲んで行ってくれ」といった隊員達の心配りに感動せずにはいられませんでした。



@FelixDlangamandla

3. 終わりに



私も観光目的で訪れたことのある宮城県沿岸部の町が見渡す限り瓦礫に覆われ、至る所に船や車がひっくり返っている光景はテレビの画面を通して見るのとは比較にならない凄まじいもので、活動当初は、命を落とされた多くの方々のことを思うと、どんなに我慢しても涙が溢れ出てきてしまいました。しかし、上述の彼らの真摯な活動振りを目にして、目を背けたい状況に直面したとしてもチームの活動を支援することが

今の自分にできることと思うようになりました。

普段は町の消防や救命救急に務める、訪日経験などない普通の南アの人達が遙か14,000 km も離れた国の震災被害に対応するため、心配する最愛の家族を南アに残して我々日本人のために真摯に捜索活動を行ってくれたこと、そして、そのような貴重な活動に同行できたことは、生涯忘れることができない思い出・経験となりました。

南アまでの帰路、隊員は一律に、「今回 RSA への参団を志願し日本での活動に参加できたことは本当に栄誉なこと」、「財産・家屋を失ってそれどころではない筈なのに、『ありがとう』と感謝の声をかけてくれた日本人の懐の深さに心を打たれた」、「我々の活動をサポートしてくれた日本政府に感謝する」と述べるとともに、全員が「今度は、救助活動ではなく、観光客として、家族と共に日本を再訪したい」と述べていたことがとても印象的でした。

おそらく、我が国に対するアフリカからの災害人的支援として初めての今回の南ア救助チームの活動は、当大使館・小澤大使の言われるとおり、日・南ア両国国民間の友好と連帯の象徴となったものと確信する次第です。



参考1:活動日程

- 3月18日(金) 午後、チャーター機にて成田着。レンタカー13台にて、先発隊と後発隊に分かれ、宮城県の現場に直行
- 19日(土) 拠点となる宮城郡利府町の宮城県総合運動公園に到着
(先発隊午前2時、後発隊午前4時頃)
午前8時頃から岩沼警察署と打ち合わせ
岩沼市(仙台空港近く)にて状況確認及び活動
- 20日(日) 午前9時頃から午後3時頃まで名取市閑上で活動
- 21日(月) 午前8時半から午後3時頃まで名取市閑上で活動(比較的強い余震発生)
- 22日(火) 午前10時から午後3時頃まで名取市閑上で活動(現場までの往路渋滞)
- 23日(水) 午前8時半から午後3時頃まで石巻市雄勝で活動(小雪)
- 24日(木) 午前8時半から午後4時頃まで石巻市雄勝で活動
救助チームの一部は岩沼市民会館を慰問、市長にサッカーボールを贈呈
- 25日(金) 午前8時半から午後4時頃まで多賀城市にて活動
夕刻、現地撤収
- 27日(日) チャーター機にて成田発

参考2:Rescue South Africa 概要

1. RSA は、2000年に設立された NGO であり、民間の資金援助により活動。南ア政府も、その士気の高さや装備の充実、各種状況への対応能力の高さを評価。
2. 最近では、2010年のハイチ地震、チリの鉱山生き埋め事故、05年10月のパキスタン地震、03年5月のアルジェリア地震、同年12月のイラン地震等にも際しても、現地での救助活動実施がある。
3. 今回の派遣にあたっては、南ア政府も資金的支援を行い、在京南ア大使館による主体的な受け入れ準備が行われた。

(番外編:「ちょっといい話」)

1. 東広島市消防局による南ア・チームへの水の提供

活動が中盤を迎えたある日の朝、キャンプ地出発間際に、ある隊員より「K(私のこと)、シャワー用の水が足りない、(キャンプ地の)向こうにいる日本の消防チームに水を分けてもらえよう交渉してもらえないか」と相談を受けたので、恐る恐る日本側キャンプ地に出向いて事情を説明し協力を求めたところ、「困っている時はお互い様」と、チームの長を務める加藤隊長は南ア・キャンプ地まで消防給水車を差し向けて水を分けてくれました。



2. 隊員の士気を高めた宮城県警中隊長の対応

南ア・チーム活動地域の選定は、県内3つの地域を管轄して行方不明者の捜索活動等にあっている宮城県警の五十嵐警部(県警関係者は「中隊長」と呼んでいた)を中心に行われました。活動2日目朝に同中隊長と打ち合わせを行った際、



ダイナー隊長より南ア国旗の胸章を贈呈、数日後、更に別の

地域で活動中の南ア・チームの前に現れたのは、胸章を制服に縫いつけた同中隊長の姿でした。これには南ア側隊員も満面の笑みを浮かべ、寒さ厳しい活動地域でのティー・タイムに五十嵐中隊長にコーヒーを提供するなど、県警とのチームワークを強く感じました。



3. 被災地住民による暖かい対応

小雪も舞い散る石巻市雄勝での活動を終えて、未だ50名ほどが避難生活を送っておられる森林キャンプに立ち寄りトイレ使用の許可を得ました。ちょうど夕飯時の忙しい時であったにもかかわらず、「『右の方をお使いください』は『Right, please』でよかったんだべか」と、笑顔でトイレに誘導してくれた女性に隊員はおじぎをしながらトイレに。また、避難者の方々のために限られた食材で夕飯を準備しておられた女性達のがんばりに、隊員達は感じ入っていました。がんばってください、石巻市雄勝の皆さん。

なお、同行プレス関係者の一人は、最終活動地であった多賀城市において、被災住民から「寒いから焚き火にあたってコーヒーでも飲んでいけ」と言われたらしく、「人生最高の思い出」として語っていました。

4. 救助隊同士のささやかな交流

南アチームがキャンプ地に到着して数日後の夜にトルコ・チームが到着するやいなや、コーナード隊員は「K、向こう(トルコ・チーム)は着いたばかりで寒い思いをしている筈、コーヒー・砂糖は提供できないが熱いお湯なら差し入れできる、ついて来てくれ」といって、熱湯の入った容器を別の隊員と共に100Mほど離れた先方キャンプ地へ。これにはトルコ・チームの隊長も感激、翌日、トルコ・チームから、「お返しに」と、トルコ・コーヒーの差し入れがありました。





宮城県総合運動公園の駐車場には、南ア・チームのほか、日本の消防、救急、そしてトルコ・チームがキャンプをはっていましたが、使うトイレは1箇所、皆、それとなく挨拶は交わしていました。7日間に亘るキャンプ生活に別れを告げる日(25日金)の夕刻、私から、日本の消防隊キャンプ地訪問を提案したところ、消防士多数で構成される南ア・チームはこれに賛同、何と、チーム全員で先方へ乗り込んで

いくことに。人が多く集まっていたテントを訪ねたところ、神戸市消防局の皆さんでした。ダイナー隊長からの出発の挨拶に対し、日本側代表の方より、「自分達も16年前に神戸の震災被害に遭った、困った人達を助けたいと思うのは南ア・チームの皆さんと一緒に、どうもお疲れさま」と活動の労いを受けました(写真中オレンジ服の方々が神戸市消防士の皆さん)。

そして、南ア帰国後、兵庫県三木市消防署の大東さんから、キャンプ地で南ア隊員と撮影された写真(右)と共に、以下のようなメッセージをいただきました。大東さん、本当にお疲れさまです。私から、大東さんのメッセージと写真を隊員側に転達させていただきます。

「こんにちは。兵庫県の三木市消防署の大東成吉(だいとうしげよし)と言います。先日の震災で兵庫県の緊急援助隊で出動した際に、宮城県利府町で南アフリカの救助隊の皆さんとベースキャンプが同じでした。私はパラメディックの方とお話した日本のパラメディックの隊員です。



@三木市消防署

はるか地球の裏側から、助けに来てくれてありがとうございました。

向こうで南ア隊員の方にも伝えたのですが、日本人はシャイなのでみんな話しかけづらそうにしているけど、本当はみんなありがとうって思っています。消防士は世界中つながっていることを実感しました。現地は非常に寒く、隊員の皆様におかれましては体調を崩されてないでしょうか？

私は4月11日から、再び現地入りしてきます。自分に出来ることを精一杯やろうと思っています。今回のことで南アフリカを少し身近に感じるようになりました。南アフリカのために自分が何かできることがあれば、喜んでしようと思っています。隊員の皆様ありがとうございましたとお伝えいただければ幸いです。」

4. 頑張ってください、岩沼市の皆さん

今回、在京南ア大からは、クローニエ政務担当一等書記官と、通訳として現地職員の志村さんが全日程同行してくれました。ある日、同書記官より、「北川さん、被災された方々にがんばって欲しいとのメッセージを南ア政府として伝えたい、何か考えられないか」との相談を受けたので、早速、県警の方に相談したところ、南ア・チームが最初に活動





した岩沼市市長を慰問できることに。我々外務省リエゾン2名は捜索活動チーム支援のため同行できませんでしたが、24日(木)、南ア政府を代表して同書記官が、またチームを代表してシェール総隊長が井口同市市長を表敬し、活動報告と共に、「Don't Give Up」と書かれたサッカーW杯のミニ公式球「JABULANI」を手交後、市長と共に避難されている方々を慰問しました(JABULANI とは現地語で『希望』

の意)。井口市長は連日の避難者支援活動で疲労困憊されておられるにもかかわらず、訪問者一行を暖かく出迎えられ、「震災発生から一度もシャワーを浴びていないが、ようやく避難されている方々に入浴してもらえる、私も、皆さんが入られたのを見守って、最後に入ります」と述べつつ、南ア・チームの活動に謝意を表されました。

6. 利府町のみなさん、ありがとう

20日(日)夕刻、日中の活動を終えて野営地に戻ったら、シェール総隊長から「K、モーリー(外務本省同僚の森本さんのこと)、タマネギが手にはいらぬか」と相談を持ちかけられ、我々2名は急遽買い出しに。某大手スーパーに行ってみたが既に閉店状態、従業員用通用口で「昨年サッカーW杯をホストした南アフリカから救助チームが50名ほど来てくれていて、キャンプ生活に必要なタマネギを探しているのですが、買える所ご存じないですか」と尋ねたところ、店員さんは一旦店の中へ。暫くして、タマネギの入った大きな袋を持ってきて、特別に販売してくれました。

翌日、再び買い出しに出かけた小官と「モーリー」は、明かりのついた「高橋商店」を発見、入ってみると、野菜やくだものが売っていたので、野営地にいる志村在京大通訳を通じてシェール総隊長の意向を確認しつつ、トマト、にんじん、キャベツ、じゃがいも、オレンジを購入、店主高橋社長は、南ア・チームの滞在を聞いて「おまけ」までつけてくださり、「何か困ったことがあったらいつでも連絡してちょうだい」と名刺までいただきました。高橋社長、ありがとうございました。

7. ありがとう、モルディブの皆さん

27日(日)、日本滞在中に経験したそれぞれの思いを胸に、隊員達は10日間滞在了した日本に別れを告げて成田を出発、夕刻、経由地モルディブに無事到着。空港到着ロビーには、往路の立ち寄り時にはなかった右のようなバナーが！

そして、宿のマネージャーに南ア救助チームの話をしたら、「モルディブも04年末にスマトラ沖大地震の影響で津波被害を受けており、同様の被害を受けた日本のために頑張った南ア・チームに敬意を表したい、OK、部屋代をディカウントする」という、日本での大仕事の後の朗報が。(南ア帰任後、「87年に同国で発生したサイクロン被害後、日本政府は無償資金協力で首都マレ島周辺に防波堤を建設、04年末の大津波襲来の際には、この防波堤が同島における被害を最小限に食い止めたとして、モルディブ地元住民が感謝の意を表明」という記事を見ました。因みに、スマトラ沖大地震発生の際、Global Relief という南アの震災生存者救済組織から数名がモルディブにも派遣されたようです。) モルディブの皆さん、本当にありがとうございます。

